

喜神

2023. 5. 10

以前からの知り合いの先生が、定期的に様々な資料を届けてくれる。この前は、私の恩師が塾長を務める「〇〇塾」の資料、聖光学院高校野球部の斎藤智也監督の資料などがあつた。受け取ったら、すぐに読む。そして、お礼のラインを送る。「いただいた資料を読みました。相変わらず、我が恩師は、高い頂です。越えられそうもありません」

斎藤智也監督の資料に「喜神を含む」というものがあつた。喜神とは、喜ぶ心である。我々の心の働きには、いろいろあつて、その最も奥深い本質的な心、これは神に通ずるが故に「神」と言う。人間は、如何なる境地にあつても、心の奥底に喜びの心を持たなければならない。これを広げていくと、感謝、あるいは報恩という気持ちになる。心に喜神を含むと、余裕が生まれ、発想が明るくなる。学ぶ姿勢ができる。

人から、あらぬことを言われると、憤るのが人情である。たとえ憤つたとしても、その人の心のどこか奥に、「いや、こういうことも実は自分を反省し鍛錬する所以になる。そこで自分という人間ができていく。これは、けっこうありがたいことだ」という思いがあればよい。

喜神を含むとは、どういう立場に立たされようと、それに心を乱されることなく、心の奥深い部分に、いつも喜びの気持ちを抱いて、ことにあたれば、どんな運勢でも開けないものはなく、上昇気流に乗ったように開けていくという意味である。

これこそが、人生の極意であり、特に人の上に立つ者が身につけておかなければならない姿勢である。喜神を含んで、ものごとが実行できるためには、どんなことであろうとも、甘んじて受けることが大切である。甘んじて受けることができるためには、自分の人生は天が導いている。したがって、どういうことが起きようとも、それはよいことの兆しであつて、わるいことは何もないという強い確信が必要である。

この思いがあるとき、私たちは目先のことに動揺することなく、一見トラブルにしか見えないことも甘んじて受け入れ、誠心誠意改善に努力することができる。人を非難することなく、清々しい気持ちで、嬉々として取り組むことができる。

そうすると、事態は変わっていかないはずがない。それを一度体験すると、信念が裏打ちされる。私たちは、この信念を強固にするために、この人生において、あらゆることを体験させられていると言えるのではないか。

頭ではわかつてはいるが、これがむずかしい。心の奥深いところに喜びの気持ちをもつには、感謝の念がなければならない。逆に、何事に対しても、あたりまえと感謝をしなかったり、不平や不満の気持ちをもつたら、心の中は冷え冷えとする。

我々は、何事もなく過ぎてゆく平穩無事な毎日に慣れてしまうと、感謝の気持ちが薄くなってしまふ。病気になったり、うまくいかないことがあつたり、トラブルがあつたりすると、そのあたりまえだったありがたさに気づく。あたりまえの毎日は、実は本当は奇跡のような稀なことである。

なかなかむずかしいことだが、よいことに対してはもちろんのこと、わるいことにも感謝ができたら、心の中に喜びの気持ちがわき上がってくる。それが、いいことも、わるいことも、甘んじて淡々と受けるということである。心中に喜神を含めば、運も開ける。喜神を含むという人生の極意を身につけたい。